心と体に寄り添う看護

しあわせ広場

安全な低侵襲手術に向けて

近年、傷が小さく身体への負担が少ない低侵襲性の手術が増加し、県立病院でもさまざまな機器が導入されました。

◆進む低侵襲化

二〇一八年には、手術台に血管造影用のエックス線装置を組み合わせたハイブリッド手術室が稼働し、心臓血管外科、脳神経外科、循環器内科を中心に低侵襲手術が行われています。二一年には、ロボット支援システム（ダヴィンチXi）による手術が外科（胃・食道・大腸・肝臓・膵臓）、婦人科、泌尿器科に導入され、従来行われていた腹腔鏡下手術の利点をさらに向上させることが可能となりました。

◆チームで取り組む

ロボット支援下手術や低侵襲手術を行うには、執刀医をはじめ、麻酔科医師、看護師、臨床工学技士ら多くの医療スタッフが手術に携わります。特にロボット支援下手術では、従来の術式より多職種間での連携が必要となるため、ダヴィンチ手術チームを編成してカンファレンスやリハーサルを繰り返し行い、患者さんが安全な手術を受けていただけるように努めています。

◆ロボット支援下手術の看護

手術が決定した患者さんには、麻酔科医の診察後、手術室看護師が手術に向けた注意事項の説明や、現在の身体の状態についての確認を行います。直接お話を聞かせていただき、患者さんの手術に対する思いや不安な点を知り、手術中の看護につなげています。

手術当日は、緊張の中、手術室に向かう患者さんに看護師が寄り添い、お声掛けしながらご案内します。手術室の中では、患者さんが寒くないように室温を調節するとともに、リラックスしていただけるようBGMを流しています。患者さんから「とても緊張しています」という声が聞かれた際には、麻酔導入まで手を握り、不安の緩和に努めています。

手術中は麻酔の効果で患者さんは眠っている状態です。看護師は手術の進行に合わせてあらゆる場面を想定し、専門的な知識や技術を用いて、患者さんの安全の確保に万全を尽くします。具体的には、ロボット支援下手術では同じ姿勢を長くとるため、しびれや皮膚の発赤が起こらないよう、より身体に優しい手術姿勢を考え支援を行います。手術の後は、担当看護師が患者さんのお部屋に訪問し、痛みの程度や手足のしびれといった身体の様子、手術を終えた後の気持ちなどを聴かせていただいています。

◆寄り添う手術看護

安全な手術を安心してお受けいただくために、手術室の看護師は、手術前から手術を終えて日常の生活に戻られるまでの間、患者さんの心と体に寄り添う手術看護を目指し、日々研さんしています。

（県立病院）

上 手術室看護師が寄り添いながら手術室へ入室する様子
下 麻酔導入の様子
＝いずれも福井市の県立病院で